



カジノ旅行の楽しさ

会員 石井 光人 (50 期)

「私のカジノ遍歴」

いわゆる先進国の中でカジノがない国は、日本とアイルランドぐらいだと言われている。それくらいカジノはどこにもある。海外旅行のついでにカジノへ行って以来、激務のリハビリと称してはカジノのあるリゾート地へ旅行することが私（と妻）の趣味となった。

これまでに行ったカジノを列举してみる。

“ラスベガス、アトランティックシティ、パームスプリングス、ミシシッピ川流域、パハマ、アルーバ、モリスヤス、モナコ、ニース、マルタ、メルボルン、シドニー、パース、ゴールドコースト、ケアンズ、ニューカレドニア、テニアン、シンガポール、マカオ、韓国等々”

スキポール空港やフランクフルト空港にもカジノが置かれており、そこへ寄るためだけにトランジットしたこともある。

「勝てますか？」

海外カジノの話をする、よく聞かれるのが、この質問である。

しかし、カジノでは基本的に勝てない。ゲームの性質上、必ずカジノ側が勝つようになっているからだ。これをハウスエッジ（控除率）といい、ゲームによって様々だが、大体1～5%である（ちなみに宝くじは50%、競馬等は25%）。したがって、長期的にみれば、プレイヤーは、理論上、必ず負ける。大数の法則には抗えない。

ただ、短期的には運よく勝つことがある。本誌のどこかに寄稿している私の妻は、いつも少しだけプレーし、勝ったらすぐに止めているので、生涯成績はプラスである。

「楽しいですか？」

では、長く続ければ負けることがわかっているに、なぜカジノに行くのか。カジノのどこが面白いのか。

一言で言えば、カジノの持つ雰囲気、非日常感なのであろうが、たぶんそれだけではない。テーブルゲームには、プレイヤーのアクションが必要となるものが多いが、私は、そのアクションに喜怒哀楽を込めており、傍から見てみると、相当に面白いらしい。そういう意味では、自分でうまくテーブルの雰囲気を作り出しているのかもしれない。私としては、体感型アトラクションに参加しているような感覚である。

ちなみに、カジノの雰囲気は、西洋系とアジア系では異なっている。西洋系のカジノでは、プレイヤーは、アルコールを片手にディーラーとおしゃべりをしながらゲームを楽しんでいる。フレンドリーなプレイヤーが多く、私の拙い英語力でも十分会話を楽しめる。Blackjack（21に近づけるゲーム）やCraps（ダイスを2つ投げるゲーム）では、テーブルが一体となり、プレイヤーが勝つと、歓声が上がり、ハイタッチが起こる。ラスベガスで長時間ダイスを投げ続けて大いに盛り上がり、他のプレイヤーから100ドルチップのご祝儀を貰ったこともある。

これに対し、アジア系のカジノでは、プレイヤーは、賭ける事そのものを楽しんでいる。テーブルもBaccarat（9に近い方が勝つゲーム）一色である。Baccaratではプレイヤー同士が戦うことが多く、殺伐とした雰囲気になりがちだが、私は、こちらにも順応している。片言の広東語を駆使しながらあれこれカードを捲っていると、いつもは無表情のディーラーも笑い出す。Baccaratでハイタッチしているのは、私のテーブルぐらいだろう。

将来、長男が成人となり、家族3人で一緒にテーブルを囲むことを楽しみにしている。



Blackjackトーナメントの優勝トロフィー